

「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

取組分野：【交流】

1. 都道府県、市町村 鹿児島県屋久島町^{やくしまちょう}
2. 事業者名 げじべえの里管理組合
3. 取組みの名称 集落で立ち上げた直売所
～観光地を生かした生産販売活動の拠点づくり～
4. 取組概要等

概要

明治時代までカツオ漁により生計をたててきたが、漁業不振により生活に困窮したため、開田に取り組み農業による生活再建を図った。開田に要した費用や伝染病の発生により多額の債務を負ったものの、地区民が一丸となってぼんかんやたんかんの果樹の増産等の農業振興に積極的に取り組み現在の基礎が形作られた。しかし、離島であることから、農業でも輸送コストの面から他県のもの比べて苦戦を強いられてきた。

平成5年、屋久島の世界遺産登録をきっかけに観光客が増え、原地区内にある美しい景観の「千尋の滝」を訪れる人も増加していた。地区では「観光客が記念写真を撮って帰ってしまうだけではもったいない、地の利を生かそう」と声があがり、平成8年に「千尋開発建設委員会」を立ち上げ、検討を重ねた結果、平成15年に観光客を顧客にした地区の核となる販売所「げじべえの里千尋販売所」を設置した。直売所は集落全戸の代表を組合員とする「げじべえの里管理組合」により運営されており、高齢化が進む中、集落運営の再生をかけ、補助金に頼らず建設から運営まで全て自力で行われている。

この販売所は地区内に新たな雇用を生みだし、現在女性5名を雇用しているほか、販売所の品揃えや商品開発、サービス等その運営に多くの意見を取り入れるため、管理組合の理事に女性やイターン者を積極的に登用している。

販売所では、果実の販売が主体であるが、中でもかごしまブランドに指定された「屋久島たんかん」は特に好評であり、予想以上の売上額になった。購入した客から「もう一度あのたんかんが食べたいので是非送ってほしい」等の声が多く聞かれたことから、平成17年度からは通信販売を始め、販売量は年々増加している。現在はインターネットでの販売に向け、準備中である。販売所や通信販売を通して、都市部の消費者の声を身近で聞くことができるだけでなく、屋久島の魅力を発信するアンテナショップとしての機能も備えるようになってきた。

千尋販売所では若手後継者を中心に開発されたオリジナル商品が販売されており、規格外の完熟たんかんを活用して作ったジュースはたんかんの濃厚な甘みと酸味そのまま味わえると好評である。また、「岳参り祈願の絵馬」の作成・販売も行っており、集落を訪れた人々が、それぞれの願いを屋久島の山の神々に託せるように、地区にあるフクの木（福の木）を使った手作りの絵馬を販売所で販売し、登山道の入口付近に奉納所を設け、観光客により様々な願い事が書かれた絵馬が数多く奉納されている。

活動の規模

項目	H14	H15	H16	H17	H18
売り上げ		16,115,285	21,058,260	19,294,586	21,303,610
解説	単位：円（げじべえの里千尋販売所の売上）				
雇用者数		6	6	5	5
解説	単位：人（げじべえの里雇用者数）				

活用している地域資源

千尋の滝

屋久島の自然が作った美しい滝は観光客に人気のスポットとなっている。ここに訪れる多くの観光客との交流を目的に「げじべえの里千尋販売所」が建設された。

屋久島特産のぼんかん、たんかん、パッションフルーツ

比較的平地に恵まれた地形と温暖な気候を生かして栽培されており、げじべえの里千尋販売所で販売されている。旧屋久町では原区の樹園面積が最も広い。

U・Iターン者

屋久島の自然にあこがれ、都市部から移住する人が増加している。現在までに、40世帯75人がIターンしているほか、Uターン者も多い。原地区では新たに住む人が一日も早く地域にとけ込めるように地区の取り決め事項を冊子にまとめて配布したり、地区内の情報の共有化とむらづくりの意識を高めるため、毎月1回集落だより「げじべえの里」を発行して情報共有化を図る等開かれたコミュニティづくりを推進している。

これらの地道な活動を通じて、新たな力を取り入れ、地域の活性化につなげることができている。

地域活性化のポイント

離島という条件不利地域にありながら、地区内にある観光地「千尋の滝」を生かし、自力で生産販売活動の拠点となる「げじべえの里千尋販売所」を建設し、地区内の農産物や加工品の販売・通信販売を行い、運営を軌道に乗せた。

運営主体である「げじべえの里管理組合」では女性や若手農業後継者のほか、U・Iターン者を積極的に活用しているが、これは、増加する島外からの移住者が地域にとけ込み、移住者も含め地区民全員がむらづくり活動に積極的に参加してもらえるよう集落便り「げじべえの里」を発行して、情報の共有化を図ったり、定期的に行われる話し合い活動や様々な行事を通じて、地区民が一人でも多く参加できるよう創意工夫しながら、むらづくり活動が進められてきた。

事業の今後の展開方向

高齢化と担い手の不足に対応するため、集落営農についての協議を始め、現在、地区の土地利用調査に取り組みを始めている。十分に議論を尽くして地域住民の意思統一を図り、4～5年後には集落営農組織を立ち上げて、農業集落として更なる発展を目指している。

また、千尋販売所に加えて、地域住民向けの直売所として集落の中心部に「里の販売所」の建設を予定している。単に農産物を販売するだけでなく、高齢者の交流の場として、そしてツーリズムの拠点として活用する計画で、その販売所の運営並びに「げじべえの里管理組合」を支援する組織として法人を立ち上げた。

販売所では現在、集落オリジナル商品として企画が遺品を加工したたんかんジュースを販売しているが、女性や若手後継者、Iターン者等の意見を取り入れて、新たな商品の開発を行って販売していく予定である。

農家・非農家の枠を超えた地域一体の自立したむらづくりを今後も継続し、げじべえの里千尋販売所の活性化、そして集落の活性化へとつなげていく。

